

東洋の思想と宗教 第三十五號 平成三十年(二〇一八) 三月 抜刷

智顛の教學における病行について

日
比
宣
仁

智顛の教學における病行について

日比宣仁

一 はじめに

病行は、南本『涅槃經』卷一一・聖行品第十九之一に、菩薩の修行である五行の一つとして説かれる。

菩薩摩訶薩、應當_レ於_二是大般涅槃經_一專心思惟五種之行。何等爲_レ五、一者聖行、二者梵行、三者天行、四者嬰兒行、五者病行。

しかしながら、同經では病行の内容についての詳しい説示がなされていない。よって、『涅槃經』における病行の内容を知ることは難しい。『涅槃經』における病行の内容の不説に伴い、『涅槃經』を研究する諸學匠は異なるいくつかの病行に對する見解を示すことになった。

本稿では、思想的背景として『涅槃經』を研究する諸學匠による病行の解釋を概観し、その中で智顛（五三八～五九七）が示す天台獨自と言える病行の理解を論じたい。

因みに、智顛は『涅槃經』に對する註釋書を著さなかつた。すなわち、智顛の『涅槃經』所説の病行に對する直接的な理解を知ることができない。しかし、『法華玄義』と大本『四教義』における別教の行位に關する説明や、『維摩經玄疏』における『維摩經』の本迹についての記述には病行が用いられる。そこでここでは、智顛は『涅槃經』所説の病行に如何なる概念を見出し、どのようにして自らの教學で取り扱ったのか、という觀點から論ずることにする。

二 現病品中に病行を見出す學匠

病行という言葉は、冒頭に觸れた南本『涅槃經』卷一一・聖行品の他、同經卷一〇の現病品第十八にも見られる。病行と言えば、一般的には聖行品で説かれる病行を指すが、現病品には「有病行處」という一句があり、讀み方によつては、現病品中にも病行の語があると言ふことができる。現病品における該當箇所を擧げる。

迦葉、有^三五種人、於^二是大乘大涅槃典、有^二病行處。非^三如來^一也。^③

ここにおける五種人は、「五種病人」^④とも呼ばれ、現病品^⑤によれば須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛の五人を指すことが分かる。この場合の病行とは、灌頂(五六一〜六三三)が『大般涅槃經疏』卷一三・現病品で、「四果・緣覺、此等、帶^レ病修行故、言^レ有病行處。」と述べるように、二乗が病を帶びながら修行する様子を表す言葉であると言える。しかし、このように現病品において病行という單語を見出すことができるのは、右の經文中に見られるように、有と處という言葉の下に一二點を打ち、「病行處に有り」と讀む場合である。この讀み方は、大正一二所收の南本『涅槃

智頭の教學における病行について(日比)

經」に付される返點通りである。しかし、大正における同一箇所には、もう一通りの讀み方も確認できる。それは、返點を打たずに「有病の行處」とする讀み方である。塚本啓祥・磯田熙文兩氏は、チベット語譯に從つて「缺點を持つたままに行ずる者」という譯註を付け、「有病の行處」と讀む^⑦。この讀みであると、現病品に病行という言葉があるとは言えない。しかしながら、チベット語譯や、サンスクリット原典を參照せず、漢譯のみで同經を研究した學匠の中には、現病品に病行の語を見出し、聖行品と現病品所説の兩病行を錯綜して理解した者もいることが確認できる。

現病品中に病行の内容を見出す代表的な學匠としては、靈味寺の寶亮(四四四〜五〇九)が擧げられよう。寶亮について知っておくべきことは、彼が五行と、南本『涅槃經』卷一九・德王品第二十二之一から六に説かれる菩薩の十功德とは、因と果、もしくは略廣の關係にあるとする考え方を根底に据えているということである。このことに關しては、灌頂の『大般涅槃經疏』卷二〇・德王品に、小山寺法瑤(四〇〇〜四七五頃^⑧)と寶亮の説として、「瑤・亮云、五行是略、十功德廣。一・二功德、廣^二聖行、乃至九・十功德、廣^二病行。」とある。ここで灌頂が指摘する、五行が十功德に廣説される

とする寶亮の説は、明駿という人物とその弟子が撰したとされる『大般涅槃經集解』卷四五・德王品第二十二に収録される。

寶亮曰：

今、十功德、還廣_レ前五_レ行、何以知之。

聖行以_レ戒・定・慧_レ爲_レ體、今、初功德、還明_レ三慧、終迄_レ漏盡、通爲_レ體也。第二功德、以_レ五通_レ爲_レ體。慧即是智慧、五通是定家之果。故以_レ此二功德、廣_レ聖行也。

第三功德、以_レ慈悲_レ爲_レ體。第四功德、以_レ十事_レ爲_レ體。十事、即是喜捨。故用_レ此二、廣_レ梵行也。

第五功德、以_レ五事_レ爲_レ體。第六功德、以_レ金剛三昧_レ爲_レ體。此二、廣_レ天行。天行以_レ八禪定_レ爲_レ體故也。五事者、一、諸根具、故能修_レ定。二、不_レ生_レ邊地、以_レ非難_レ故、能修_レ定。三、諸天護念。四、世間愛念、宿植_レ德本_レ故、天護人愛、便能修_レ定。五、得_レ宿命智、即是定果也。修_レ此五事、便得_レ天行。金剛三昧、即是衆定中之極。故知、廣_レ天行也。

第七・第八兩功德、廣_レ嬰兒行。第七、以_レ四法_レ爲_レ體。謂親_レ近善友、聽_レ聞正法、繫_レ念思惟、如_レ說修行。此

四、本是始_レ行之所_レ行、教_レ嬰兒_レ之法。第八、以_レ九衆法_レ爲_レ體。從_レ斷_レ五陰、乃至_レ心善解脫。亦、是始_レ教法。是故、得_レ知_レ此二功德、竝廣_レ嬰兒行也。第十功德、廣_レ病行。而相傳用_レ前三種病人、及須陀洹等五種病人、爲_レ病行相。今、第九功德、還明_レ三種病人也。第十功德、明_レ三十七品。此三十七品、即是彼五種病人所_レ行之法。是故廣_レ病行也。

ここに示される五行と十功德の對應を示すと、次のようになる。

第一功德・第二功德↓聖行を廣説

第三功德・第四功德↓梵行を廣説

第五功德・第六功德↓天行を廣説

第七功德・第八功德↓嬰兒行を廣説

第九功德・第十功德↓病行を廣説

すなわち、寶亮の病行に對する理解を知るためには、德王品所説の第九功德と第十功德を参照すればよい。寶亮は、第十功德に病行が廣げて説明されると述べる。そして、第九功德には三種の病人が再説され、第十功德には五種の病人が行ずる修行である三十七品が明かされると記す。三種の病人については後述するが、以上の事柄を根據に、第九・第十の兩

功德に病行が廣説されるとし、三種の病人と五種の病人を用いて病行の相とすることが、寶亮が主張するところであると云えよう。ここに言う三種の病人と五種の病人とは、現病品所説の病人なので、寶亮は現病品における三・五兩種の病人に、病行の内容を見出したということになる。因みに、布施浩岳氏による先行研究は主にこの寶亮の説に依據し、病行の内容を第九・第十功德を用いて論じる。

さて、『大般涅槃經集解』卷二六や卷二七に記録される僧亮（四〇〇〜四六八頃）の説においても、聖行品における病行と、現病品の病行との區別が曖昧になる。『大般涅槃經集解』卷二七・聖行品第十九には、前品の現病品に言及しながら次のように記される。

案、僧亮曰、次答_レ問_二我今請如來、爲諸菩薩故、願爲說甚深、微妙諸行等_也。前品已說_二病行_一。請_二其餘_一者故、名_レ等也。五行者、上雖_下說_二病行_一、對_レ治煩惱、未_レ說_二行相及行次第_一。今說_レ之也。

これは、聖行品の本文解釋に入る前の記述である。僧亮によれば、病行は前品の現病品に既に説かれるが、五行全體の行相と行の次第については未だ明かされないので、聖行品でそのことが説かれる。僧亮が現病品のどの部分に病行が説か

智顛の教學における病行について（日比）

れるとするのかは、次の『大般涅槃經集解』卷二六・現病品第十八の記述から知られる。

迦葉世有三人其病難治、至_三供養恭敬爲他說者_一、案、僧亮曰、次答_三云何說畢竟及與不畢竟_也。先說_二病行_一者、大衆請_二佛治_レ病、說_二先治病之行_一也。藥以_レ對_レ病爲_レ名。依_二涅槃_一修_レ行。無_レ病不_レ治。欲_レ顯_二病行之能_一。

① 先說_二諸經_一、有_二不治之病_一也。此_三三種人_一。

② 契經所_レ不_レ治、是說_二畢竟二乘之病_一。聞_二餘方等_一、雖_二發心_一、不_レ知_レ佛、常終。

不_二成佛_一、不_レ名_二畢竟_一者、如_二上諸人_一。

③ 聞_二涅槃_一生_レ信。不_レ須_二外治_一。自能成佛、斷_二疑說_一也。得_二病行之名_一事、盡_二於此_一也。

ここでは、現病品において、三種の病人が説かれる箇所が註釋される。引用文中の棒線①から③には、僧亮の言葉で三種の病人が記される。三種の病人の概要を、南本『涅槃經』卷一〇・現病品第十八の原文を用いて示せば次のようになる。因みに、次の番號①〜③の記述が示す病人は、それぞれの僧亮が説明する棒線①〜③の病人と對應する。

① 病人、若有_二瞻病_一・隨意・醫藥、若無_二瞻病_一・隨意・醫藥、如_レ是之病、定不_レ可_レ治。

② 病人、若有_レ瞻病・隨意 醫藥、則可_レ令_レ差。若無_レ此三、則不_レ可_レ差。

③ 病人、若有_レ瞻病・隨意・醫藥、若無_レ瞻病・隨意・醫藥、皆悉可_レ差。

瞻病とは病人を看護する者、醫藥は病を治す藥であることは分かる。隨意については、正確な現代語譯は定かではないが、病人の心に隨つて病を對處しようとすることを指す言葉であろう。①は、この瞻病等の三の有無に拘わらず、病が治らない人を示す。これは、現病品で提示される、「一、謗大乘。二、五逆罪。三、一闡提。」の三人を譬えたものである。僧亮はこれを不治の病と呼ぶ。次に、②では瞻病等の三があれば病を癒すことができ、なければ癒すことができない人が挙げられる。これは、佛・菩薩の說法によつて發心し、說法がなければ發心することのない、「聲聞・緣覺」を譬える。僧亮はこの①と②を指して、成佛せず、畢竟と名づけざるものとする。最後の③では、現病品において、「有_レ人、或爲_レ自身、或爲_レ他身、或爲_レ怖畏、或爲_レ利養、或爲_レ諛諂、或爲_レ誑他、書_レ寫如_レ是大涅槃經、受持・讀誦・供養・恭敬、爲_レ他說者」と表現される人が、瞻病等の有無に關係なく病を治す人に譬えられる。この③について僧亮は、「聞_レ涅槃

生信。不_レ須_レ外治。自能成佛、斷_レ疑說也。得_レ病行之名一事、盡_レ於此也」と述べる。すなわち、僧亮は現病品の三種病人の内、第三の病人、すなわち、『大涅槃經』を信じ、自らの力で自身の病を治し、疑說を斷ずる人から病行の内容を見出すことが分かる。

三 治病としての病行

北本『涅槃經』を註釋した地論宗南道派の淨影寺慧遠(五三三〜五九二)は、既に見たような、五行説における病行の内容を現病品に見出す有人の說を擧げて批判し、異なる見地から病行を解釋する。『大般涅槃經義記』卷五の聖行品を註釋する箇所を擧げる。

有人釋言、前品所_レ論五種之人、有_レ病行處、是其病行。彼、是聲聞・緣覺病行、何關_レ菩薩。又、前所_レ論、雜病之行。今、此所_レ教_レ治病之行。與_レ前大別。何得_レ指_レ前。

又、前品中、未_レ標_レ五行。以_レ何義_レ故、豫說_レ病行。判無_レ斯理。若前、非_レ是。

この記述によれば、有人は前品である現病品に論じられる五種の人が病行處にあることを指して病行とする。その有人の說に對して慧遠は、現病品における病行を二乗の病行と

し、雜病の行と呼ぶ。そして、聖行品における病行を治病の行と呼び、雜病の行と治病の行をはっきりと區別する。また、次の『大般涅槃經義記』卷五には、さらに明確な慧遠による病行の定義が記される。

梵行品末、闍王懺罪、治_レ病之法、應_二是病行。故下文
中、世王殺_レ父、卽是心病。身瘡增_レ劇、是其身病。佛放_二
慈光、治_二其身病、爲說_二妙法、除_二其心病。治_二此兩病_一
故、名_二病行_一。

慧遠は、北本『涅槃經』卷一九・梵行品第八之五から卷二〇・同品之六に互つて説かれる阿闍世王の惡業、及びその罪障消滅に關する經文中に病行を見出す。また、『涅槃經』の中で阿闍世王がその父親を殺すことを心の病、阿闍世王の身體にできた腫れものが増すことを身の病と、それぞれする。そして、釋迦が慈光を放つて妙法を説き、阿闍世王の心・身兩病を治癒することを病行とすることが分かる。慧遠が病行を治病の修行と理解することは、『維摩經義記』卷三本に見える記載からも言える。

自下兩問、就_二所化人_一、明_二治病法_一。此則、菩薩五行之中
治病行也。於_レ中初就_二種性已前實病之人_一、明_二慰喻儀_一。
彼未_レ知_レ法、須_二他慰_一故。云何菩薩調伏心下、就_二種性

智顛の教學における病行について（日比）

上實病之人、明_二調伏法_一。彼自知_レ法、不_レ須_二他慰_一、能
自調故。⁽²⁸⁾

慧遠は、『維摩經』卷中・問疾品第五における、文殊師利から維摩詰に對する、「菩薩、應_二云何慰_レ喻有疾菩薩_一」という問いと、「居士、有疾菩薩云何調_レ伏其心_一」⁽²⁹⁾という問いの兩問を指して、菩薩五行の中の治病の行とする。兩問の内、第一問目の答えとして、維摩詰は具體的な有疾菩薩に對する説法の手立てを述べ、最後に「菩薩應_レ如_レ是慰_レ喻有疾菩薩、令_中其歡喜_上」⁽³⁰⁾と、その答えを結ぶ。また、第二問目の回答としては、「有疾菩薩、應_レ作_二是念_一」⁽³¹⁾と述べてから、有疾菩薩が作すべき念を説くという形を採る。よつて、慧遠は病を治す具體的方法そのものに病行を見出したことが分かる。⁽³²⁾

さて、寶亮と同時代の僧宗（四三八〜四九六）も病行を治病の意味で理解した。それは、彼が提示する五行全體の構造を把握することによつて知られる。『大般涅槃經集解』卷二七・聖行品第十九における記述を舉げる。

僧宗曰、就_レ辨_二五行之義_一、前三、各有_レ體也。後二、就_二功用_一立_レ義。若通_レ而爲_レ論、三行之名、皆可_レ名_レ聖也。
若別談_二功用_一、取_二偏顯_一立_レ稱、餘義則沒而不_レ說也。聖
者、正也。戒・定・慧、爲_レ體。謂、正直之路、無_二邪曲_一

也。夫、自行化他、乃行之通也。今就「戒・定・智慧」、自行之體中、出「化他之德」。謂、天行・梵行者也。天者、言「淨」。梵亦、淨也。云何爲「異」、此二名者、就「果立」稱。下文言「天者、謂、第一義天」。又、經論並云、各有「旨也」。梵以「對」欲界重籠「得名」。天者、以「對」人爲「稱」。經云、梵名「涅槃」。是道欲到也。雖「從」果立「稱」、而天行、以「四禪」爲「體」、廣「前定」也。梵行、以「四等」爲「體」、廣「前慧」也。戒用淺劣、略而不「廣」。以「此三行」、能治「病故」、字「之病行」。示「同」嬰兒、即稱「嬰兒行」也。⁽³⁴⁾

この記述からは、僧宗による五行全體の解釋が讀み取れる。すなわち、聖・梵・天の前三行には體があり、嬰兒・病の後二行は功用によつて義を立てるとするのが僧宗の立場である。また、三學を體とする聖行を自行の體と呼び、その中から化他の徳である天行と梵行が出るという構造が讀み取れる。そして、僧宗はこの聖・梵・天の三行を以つて病を治す行爲が病行である、と理解することが分かる。

四 智顛による病行の理解と湛然

冒頭にも述べたように、智顛による『涅槃經』に對する註

釋書はない。よつてここでは、智顛の『維摩經』註釋書類において、『涅槃經』所說の病行が、どの様に採用されるのかということ論じる。そこで注目すべきは、智顛は『維摩經』のどの部分を、『涅槃經』の病行と結びつけたのかということである。このことは、次に擧げる『維摩經玄疏』卷四の記述から知ることが出来る。

今明「三本・迹通」此經文「者、即爲「三意」。一通「室外」、二通「入室」、三通「出室」。…二通「室內」者、室內託「疾興」教、示「於病行」、同「一切衆生之實病」。衆生之疾、雖「有多塗」、論「其正意」、不「出」四種。今以「四種之迹」病行、同「四種之實病」。即是現「病行」之迹。爲「問疾品」也。次、下五品、皆從「此品」出。若通「問疾品」、下五品皆自「通」也。⁽³⁵⁾

ここには、本・迹の概念が『維摩經』の經文中に一貫してゐることが記される。同經では、釋迦から病床に臥している維摩詰の見舞いに行くように命じられた佛弟子と諸菩薩が、その命令を斷り、最終的に文殊菩薩が維摩詰を見舞うという一連の物語が説かれる。ここに見られる、室外・入室・出室の語は、この物語を維摩詰が養生している室の内と、外とで場面分けをする單語と見てよい。すなわち、室外とは、佛

弟子と諸菩薩が釋迦の命令を拒否する場面。これは、『維摩經』卷上・佛國品第一、方便品第二、弟子品第三、菩薩品第四に相當する。室内とは、文殊菩薩が維摩詰の養生する室の中に入っている場面であり、同經卷中・文殊師利問疾品（以下、問疾品と略す）第五、不思議品第六、觀衆生品第七、佛道品第八、入不二法門品第九、香積佛品第十に當たる。これらを、室内六品と總稱する³⁶⁾。そして、出室ではその部屋から釋迦がいる菴羅樹園に場面が移る。これは、法供養品第十三、囑累品第十四に説かれる。智顛は、これらの三つの場面の内、第二の室内における本迹の説明として、維摩詰が病を示すことによつて教えを興すことを用い、これを指して病行を示すこととする。また、衆生の病は大きく四種に集約することができ、『維摩經』卷中・問疾品第五では、本の立場にある維摩詰が四種の迹を以つて病を行じ、四種の實病に同化する³⁷⁾ことが説かれ、これを維摩詰による方便である病行の示現とする。すなわち、智顛は病行の示現を『維摩經』問疾品に見出したと言える。このことは、大本『四教義』卷一〇にも、「病行、即是此維摩經問疾品、室内六品之所明也。」と明記される。また、智顛の説において病行とは、飽くまで迹、もしくは方便の範疇で語られるものであり、實質的な

智顛の教學における病行について（日比）

病、すなわち實病を患う状態でも、それを治癒する行いでもないということが注意されるべきである。

『維摩經玄疏』における實病は、『維摩經文疏』では實疾という語で扱われ、權疾の對義語として詳しい説明がなされる。すなわち、『維摩經文疏』卷一九・問疾品第五之初には、「疾義、雖復、衆多、原其正意、不_レ出_二權・實_一二種。權、是諸佛・法身菩薩、無_レ疾現_レ疾故、名爲_レ權。實、是九道衆生、實有_二因果患累_一故、名爲_レ實。」³⁸⁾とあり、疾には權・實二種があるとされ、それぞれ、諸佛・法身菩薩と、九道の衆生とがなり得る病であるとされる。『維摩經文疏』卷一九における實疾に關する説示を擧げる。

夫、疾是療礙之法。療_二礙色・心_一故、名爲_レ疾。亦、名爲_レ病。亦、名爲_レ患也。所_レ言、因疾者、即是因中四分煩惱、療_二礙心神_一、致_二諸惱患_一、即是心疾。而_レ言_レ因者、煩惱是因故、説爲_二因疾_一也。果疾者、若感_二得四大之身_一、地・水・火・風、同處_二一篋_一。其性各異、更相違反、互起_二增・損_一、療_二礙色身_一、致_二諸惱患_一、即是身疾。而_レ言_二果疾_一者、以_レ酬_二煩惱之因疾_一故、言_二果疾_一也。³⁹⁾

四分煩惱によつて心が妨げられ、發症する惱患を因疾とし、心疾とも呼ぶ。また、身を構成する四大の不調和によつ

て起くる悩患を果疾、もしくは身疾とする。すなわち、實疾とは、四分煩惱を因とし、それによって身體を構成する地・水・火・風の四大が調和しなくなる状態を果とする。實疾を、九界の衆生がなり得る、修行や衆生濟度という性質を持たない、いわゆる一般的な病氣と理解しても問題はない。一方、『維摩經文疏』卷一九において權疾に關しては、次のように説明される。

明權疾者、菩薩住大涅槃、有五種行。所謂、若得三諦、三諦三昧、具二十五三昧、即成聖行。從聖行、生天行・梵行。從梵行、起嬰兒行・病行。嬰兒行、從大慈善根而起、病行、從大悲善根而起。所以然者、諸佛菩薩、清淨法身、諸惡永斷、衆善普會。有何方便小善之可_レ行。有何界内・界外因果之疾療也。但以大悲善根、欲拔界内・外衆生因果之患累故、形充法界。無疾現_レ疾、同衆生疾、即是病行。

ここでは、諸佛・法身菩薩がなり得る權疾の説明が、『涅槃經』所説の五行を用いることよつてなされる。そして、既に諸惡を永く斷じ、諸々の善を普く集めてゐる諸佛・菩薩が、界内・外の衆生の患累を除くために、小善の方便ではなく、大悲善根によつて、衆生の疾に同ずることを病行と呼

ぶ。以上のことから、智顛の教學における病行の概念は、『維摩經』問疾品から抽出することができ、その内容は維摩詰が行つたように、諸佛・菩薩が方便として權疾を發症することであることが分かる。

また、權疾、もしくは方便としての病について論ずるに當たり、『維摩經』卷上・方便品第二における、「其以方便、現_二身有_レ疾_一。」という文が連想される。この記述は、方便品の中腹にあり、智顛はこれによつて方便品を前後に分け、後半部分を半品經文と呼び、『維摩經文疏』卷一〇・方便品之二で、次のような解説をする。

今明、此半品經文、自有四意。一、正明方便現_レ疾。……第一現_レ疾者、經言_下其以方便、現_中身有_レ疾、淨名法身、無_レ疾而現。同_二此疾_一者、此表_下法身無爲、無_二有爲緣集因果患累、爲_レ欲_レ利物、方便、現_レ有_二凡夫有爲因果之患_一、又同_二二乘無爲緣集因果之患_一、又同_中菩薩自體法界因果緣集之患_レ也。

問曰、何得_レ知_レ然。

答曰、此經下文云、菩薩疾者、從大悲起。以衆生疾故、我亦疾。若衆生得_レ無_レ疾者、則我無_レ疾也。

智顛は、維摩詰が病氣になり得ない法身であるにも拘ら

ず、衆生を利することを欲して疾を示す證文として、『維摩經』卷中・問疾品第五における經文の意を取って引用する。つまり、智顛は方便品で明かされる維摩詰の方便としての病を説明するときに、自ら『涅槃經』の病行と關連させた問疾品の經文を用いる。問疾品の原文は次の通りである。

維摩詰言、從_レ癡有_レ愛、則我病生。以_二一切衆生病_一、是故我病。若一切衆生病滅、則我病滅。所以者何、菩薩爲_二衆生_一故、入_二生死_一。有_二生死_一、則有_レ病。若衆生得_レ離病者、則菩薩無_二復病_一。…菩薩疾者、以_二大悲_一起。

ところで、湛然は『法華玄義釋籤』卷九において、現病品に病行の内容を見出す學匠に言及する。

明_二病行_一者、嬰兒行後、無_二病行文_一。自_レ古講者、指_二前十卷中現病品文_一、以爲_二病行_一。

ここからは、湛然が病行は『涅槃經』において詳説されず、それによつて、古の講説者は現病品中に病行を見出すと把握していたことが分かる。ここから読み取れる湛然の立場は、現病品に病行を見出す説を特に批判しない點であろう。また、湛然による病行の概念の理解は、次に挙げる『法華玄義釋籤』卷九の記述に見出すことができる。

下文、又列_二三種病人_一。謂_二五無間・誹謗正法・作一闍提。

智顛の教學における病行について（日比）

又有_二五種病人_一。謂_二八・六・四・二、及十千等_一。竝是示_レ爲_二惡行_一故也。故與_二漸次嬰兒行_一同。若準_二今意_一、例_二嬰兒行_一、既遍_二大・小_一。病行、同_二惡理亦應_レ遍_一。

湛然は、病行の説明として現病品における三種・五種兩病人に言及し、これらは竝んで惡行を示すとする。この記述からは、湛然が現病品中の三種・五種兩病人に病行を見出し、いたことが分かる。湛然が現病品中に病行を見出すことは、次節でも少しく觸れる。ここには惡行を示すことは、漸次の嬰兒行と同様のことであると書かれる。右の記述で、湛然が理解した病行の概念を見出す上で重要な箇所は、「病行、同_レ惡理亦應_レ遍」という記載であろう。すなわち、湛然は病行とは菩薩が惡と同ずるも、その根底にある理は大・小に互つて遍滿した状態で行われる行法であると解釋する。この『法華玄義釋籤』の記述は、次に挙げる『法華玄義』卷四上の記述に對する註釋の一部である。

病行者、此從_二無緣大悲_一起。若始生_二小善_一、必有_二病行_一。今、同_二生善_一邊、名_二嬰兒行_一。同_二煩惱_一邊、名爲_二病行_一。以_二衆生病_一、則大悲薰_レ心。是故我病。或遊_二戲地獄_一、或作_二畜生形_一、化_レ身作_二餓鬼等_一、悉是同_二惡業病_一。如_二調達等_一。又示_レ有_二父母・妻子・金鏘・馬麥・寒風索_レ衣・熱

病・求_レ乳、此示_三人・天有_二結業・生老病死之病_一。又示_二道場三十四心斷_レ結、示_レ同_二乘見思之病_一。方便附近、語令_三動作_一。

湛然は、『法華玄義釋籤』卷九において、「或遊戲下、正明_二行相_一。」と述べる。つまり、『法華玄義』で菩薩の所行として挙げられる、地獄に遊戲することや、畜生・餓鬼の形を現作すること、父母妻子がいる様子を示すこと等は、衆生を救済するための方便であり、湛然はこれこそが病行の相であるとする。

以上のことから、現病品の三種・五種兩病から病行を見出す湛然の思想は、智顛と共通するとは言えないが、『法華玄義釋籤』卷九の「病行、同_レ惡理亦應_レ遍」という記述が示す湛然の病行に對する理解は、智顛の思想に基づくと言えよう。

五 『摩訶止觀』と病行

天台の教學における病に關する一般的に知られる學說としては、『摩訶止觀』所説の病患境が挙げられる。同説における病と、上來論じた病行の説における病の概念は異なるのかという問題があるので、ここで少しく觸れることにする。『摩

訶止觀』卷八上には、次のように記される。

經云、破_二壞浮囊_一、發_二撤橋梁_一、忘_二失正念_一。病故毀_レ戒、如_レ破_二浮囊_一。破_二禪定_一、如_レ撤_二橋梁_一。起_二邪倒心_一、惜_二膿血臭身_一、破_二清淨法身_一、名_レ忘_二失正念_一。爲_二是義_一故應_レ觀_二病患境_一。

ここでは、病患境を觀察する意義が、『涅槃經』の經文を引用することによって説かれる。すなわち、戒を犯し、禪定を破り、邪な心を起こし、汚れた身體に執着し、清淨なる法身を破してしまふ、正念を忘失した状態の根本的な原因は病である。この病を對處するために、病患境を觀察するべきなのであろう。この觀察の對象となる病患境と、『涅槃經』所説の病行における病の概念の相違は、次の『摩訶止觀』卷八上の記述によつて、少しく明らかにする。

第三觀_二病患境_一者、：病有_二二義_一。一、因中實病。二、果上權病。若假_二臥毘耶_一、託_レ疾興_レ教。因以_二身疾_一、訓_二示凡俗_一、斥_レ小呵_レ大。乃共_二文殊_一、廣明_二因疾_一、三種調伏。廣明_二果疾_一、四種慰喻。又、如來、寄_レ減談_レ常、因_レ病說_レ力。皆是權巧、入_二病法門_一、引_二諸病惱_一。如_レ此權病、非_二今所_レ觀_一。今所_レ觀者、業報生身、四蛇動作、廢_レ修_二聖道_一。若能觀察、彌_二益_一用心。

この記述によれば、病には權・實の二種がある。ここでは、權病の説明として、前節で扱った毘耶（毘耶離城）で床に臥している維摩詰の話が用いられる。そして、この權病は病患境を觀察するにあたって、對象にはならないものであることが記される。一方、觀察の對象となるものとして、後に觸れる『金光明經』の説が引用され、業の報いによって存在する生身に起る病に言及することが分かる。つまり、これは衆生の身に起る實病を指すと云える。ここに採用される維摩詰の疾の説は、智顛が權病としての病行を見出す説であるが、ここでは『涅槃經』における病行の説が用いられないので、この『摩訶止觀』の説のみでは『涅槃經』の病行における病と病患境における病の相違を完全に明確にはできない。しかし、湛然は該當箇所註釋で、『涅槃經』の病に關する説を探り擧げ、『維摩經』における病と同じ權病として扱い、『摩訶止觀』の病患境における實病とはつきりと區別をする。『止觀輔行傳弘決』卷八下の記述は次の通りである。

病有二義下、次分二權・實。若偃臥下、初明二權疾。卽如^三淨名託^二疾方丈。國王・長者・大臣・人民、皆往問^レ疾。因以^二身疾、廣爲說^レ法。卽凡俗衆也。……

因病說力者、現病品中、迦葉問^レ佛。如來、往昔、已於^二智顛の教學における病行について（日比）

無量萬億劫中、修^二菩薩行、常行^二愛語、利^二益衆生、不^レ令^二苦惱。施^二諸病者、種種醫藥。何緣、於^レ今自言^レ有病。……如來、成^レ道初坐^三道場、逮^二得十力。今者、不^レ應^レ如^二彼嬰兒。如來因、卽放^二大光明、種種神變已、語^二迦葉一言、我於^二往昔、無量無邊億那由他百千萬劫、已除^二病根、永離^二倚臥。是諸衆生、不^レ知^二大乘方等密語、便謂^二如來實有^二病惱。如^レ是說者、竝因^二現病、迦葉請問。又、因疾者、三惑也。果疾者、二死也。實疾者、衆生實惑、及斷未^レ盡者。權疾者、諸大菩薩、隨^レ斷^二何惑、則能示現、權同^二實疾。如^レ是權・實、竝非^二今所^レ觀。從^二今所觀^一下、判也。今所^レ觀境、是凡夫四大實疾。仍因^レ觀^二陰及煩惱等、四大增損。卽^{前所^レ引、金光明經所^レ明病相、爲^二今境^一也。}

ここでは、先ず『摩訶止觀』において權病（疾）の説明に『維摩經』の説が採用されることが指摘される。そして、『涅槃經』現病品の取意文に見出される、諸大菩薩が權に實疾に同化するという文脈における權・實二病は、病患境における觀察對象にはなり得ないことが示される。ここには、直接、病行の語は見出されませんが、現病品における、實には病がなく、永く病根を除いているが、假に病の姿を示現して衆生を

教化する佛の姿の描寫は、智顛が示す病行の内容に適う。また、これは維摩詰の權疾の内容にも相當する。よつて、『摩訶止觀』病患境で扱われる病の概念と、『涅槃經』、もしくは維摩詰が示す病の意味は異なると言える。また、『摩訶止觀』病患境に對する權病の說として、湛然が『涅槃經』現病品に權病の概念を見出し、それを維摩詰が示した權病と並列して擧げることから、湛然是智顛が示した『涅槃經』の病行を權病とする思想に賛同する傍ら、智顛は示さない『涅槃經』現病品に病行の内容を見出すという理解を示すと考えられる。

引用した『止觀輔行傳弘決』には、病患境における觀察對象の說明として、曇無讖（三八五〜四三三）譯『金光明經』卷一・空品第五の記述への言及がある。その原典を擧げれば、次の偈の通りである。

業力機關、假爲空聚、地・水・火・風、合集成立、隨時增減、共相殘害。猶如四蛇、同處一篋。四大虺蛇、其性各異、二上二下、諸方亦二。如是蛇大、悉滅無餘、地・水二蛇、其性沈下。風・火二蛇、性輕上升。心・識二性、躁動不停。

これは、四大の集合によつて假に成立する人間の體が業の力によつて常に不安定である様子を説く經文である。人體を

構成する四大を一つの箱に入っている四匹の蛇に譬え、それぞれが異なる動きをし、調和が取れていない状態が描寫されることが分かる。湛然是この經文を指して四大の實疾と述べ、病患境で觀察すべき對象とし、『涅槃經』や『維摩經』から智顛が見出す病行とは異なるものとして扱うのである。

六 結語

『涅槃經』を研究する諸學匠による、同經で詳説されない病行の内容理解に關しては、現病品の三種・五種兩病人の說や、梵行品の阿闍世王の話、德王品所説の十功德、もしくは聖行品所説の五行の構造の中などから病行の内容を見出すという、異なつた見解が確認できる。

一方、智顛は『維摩經』問疾品から『涅槃經』所説の病行の概念を見出す。すなわち、智顛は維摩詰が現する病に注目し、これを諸佛・法身菩薩が現する權疾と位置づけ、衆生が患う實疾と合わせて權・實兩疾の理論を展開する。そして、『涅槃經』には詳説されない病行の内容を、『維摩經』を註釋するにあつて獨自に咀嚼し、權疾の說明に病行の說を採用するのである。

因みに、慧皎（四九七〜五五四）の『高僧傳』によれば、

僧宗・寶亮は『維摩經』を講説、もしくは註釋をした⁽⁸⁾。しかし、兩者共、病行の解説に『維摩經』を關連づけることはない。また、既に觸れたように慧遠は『維摩經』の解説に病行を用いるが、文殊菩薩に對して維摩詰が説いた、有疾菩薩に關する治病法のみを病行の内容を見出す。このことから、『涅槃經』における病行を、維摩詰が示す疾病に重ねて理解することは、智顛獨自の思想によるものと言うことができる。

ところで、湛然の病行の理解は、智顛の理解と概ね同様であると言える。また、智顛と湛然が理解する病行における病の概念は、『摩訶止觀』病患境において觀察對象となる病の概念を明確に區別されるべきである。しかし、現病品の三種・五種兩病から病行を見出すという湛然の立場が、智顛の理解とは異なることも指摘できる。さらに、本論では扱わなかつたが、灌頂は智顛と湛然とは異なる立場から病行を理解する。このような、中國天台宗内における『涅槃經』所說病行に對する理解の相違に關しては、灌頂の理解を中心として別の機會に論じることとする。

智顛の教學における病行について(日比)

(註)

- (1) 大正一二頁・六七三頁中。
- (2) 大本『四教義』卷一〇の、(大正四六・七五九頁上)における別教菩薩の十地に關する説明に病行が採用される。また、『法華玄義』卷三下の行妙段中には、「約五數明_二行妙_一、先明_二別五行_一、次明_二圓五行_一。別者、如_二涅槃云_一。五種之行。謂_二聖行・梵行・天行・嬰兒行・病行_一。」(同・七一六頁下)とあり、別圓兩教の行位が五行の立場から説明される。また、『維摩經玄疏』卷四(大正三八・五四七頁上中)で、本迹の義が説かれる箇所には、病行への言及が見られる。
- (3) 大正一二・六七三頁上。
- (4) 『大般涅槃經集解』卷四五・德王品第二十二(大正三七・五一五頁中)における寶亮の説。
- (5) 大正一二・六七三頁上中。
- (6) 大正三八・一二一頁中。
- (7) 「有病の行處 skyon dan bcas pa bshin du spyod (缺點を_二持ったま_一に行ずる者)」
Hphags pa yons su nya nan las hlus pa chen pohi mdo (tr. by Wan phab shun, Dge bahi blo gros, Rgya mtshohi sde) Toh No.119.
 (塚本啓祥・磯田照文『新國譯大藏經』2、「南本涅槃經」II、大藏出版、三一〇頁)
- (8) 大正一二・七三〇頁上〜七六六頁下。

- (9) 法瑤の生没年については、布施浩岳『涅槃宗の研究』後篇(國書刊行會、一九七三年)三四～三五頁を参照。
- (10) 大正三八・一五三頁中。
- (11) 布施浩岳『涅槃宗の研究』後篇(國書刊行會、一九七三年)、四八～五五頁では、『大般涅槃經集解』が明駿及びその弟子達により編集されたとする見解が論じられる。また、同書の撰述年代に關しては『涅槃宗の研究』後篇、五五～七〇頁にかけて論じられ、明駿という人物が、慧皎(四九七～五五四)とほぼ同時代の人であり、『大般涅槃經集解』の撰述年代が、慧皎の『高僧傳』のそれとほぼ同時期にあるとされる。因みに、『大正』卷三七所收の『大般涅槃經集解』は、寶亮等が編集した文献として記録される。
- (12) 大正三七・五一五頁上中。
- (13) 南本『涅槃經』卷二四・德王品第二十二之六で第九功德について記される箇所における、「如來、初開涅槃經時、説有三種。一者、若有病人、得良醫・藥、及瞻病者、病則易差。如其不得、則不可愈。二者、若得、不得、悉不可差。三者、若得、不得、悉皆可差。一切衆生亦、復如是。若遇善友・諸佛・菩薩、聞説妙法、能發阿耨多羅三藐三菩提心。如其不遇、則不能發。所謂、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛。二者、雖下遇善友・諸佛・菩薩、聞説妙法、亦不能發。若其不遇、亦不能發。謂、一闍提。三者、若遇、不遇、一切悉能發阿耨多羅三藐三菩提心。所謂、菩薩。若言遇與不遇、悉發阿耨多羅三藐三菩提心者……。」(大正一二・七六二頁上)という記述と、同品の、「善男子、云何菩薩修大涅槃微妙經典、具足最後第十功德、善男子、菩薩修習三十七品、入大涅槃常・樂・我・淨、爲諸衆生、分別解説大涅槃經、顯示佛性。若須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・菩薩、信是語者、悉得入於大般涅槃。若不信者、輪迴生死。」(大正一二・七六六頁上)という第十功德に關する説明文が根據となる。
- (14) 布施浩岳『涅槃宗の研究』後篇(國書刊行會、一九七三年)、三八〇～四〇〇頁では、五行のそれぞれの内容が、十功德を用いて説明される。また、その内の三八二～三八三頁では病行について論じられる。
- (15) 南本『涅槃經』卷三・長壽品第四(大正一二・六二〇頁上)における、迦葉菩薩が唱える如來への請問としての偈文。
- (16) 大正三七・四七七頁上中。
- (17) 南本『涅槃經』卷一〇・現病品第十八(大正一二・六七三頁上)。
- (18) 南本『涅槃經』卷三・長壽品第四(大正一二・六一九頁下)の偈文。
- (19) 大正三七・四七六頁下。
- (20) 大正一二・六七三頁上。

- (21) 大正一二・六七三頁上。
 (22) 大正一二・六七三頁上。
 (23) 大正一二・六七三頁上。
 (24) 北本『涅槃經』卷一・聖行品第七之一(大正一二・四三二頁上)の註釋。慧遠は、『大般涅槃經義記』の章立てから推察すれば、北本『涅槃經』を用いた。因みに、『大般涅槃經義記』卷一に、北本『涅槃經』卷一・長壽品の説明として、「壽命品者、依『多品經』名爲『序品』。依『小品經』名『壽命品』。諸經立品、大例有三。或有從廣。或、復就略。或、當相以名。此言『壽命』、從『略言耳。』(大正三七・六一四頁中)とある。ここにおける、多品經とは、二十五品からなる慧嚴(三六三〜四四三)譯南本『涅槃經』三十六卷と、十八品で成り立つ法顯(三三九頃〜四二〇頃)譯『泥洹經』六巻を指すと考えられ、小品經とは、十三品からなる曇無讖(三八五〜四三三)譯北本『涅槃經』四十巻に相當すると言える。よって、慧遠は當然南本や六巻本の『涅槃經』の存在を前提としていたことが分かる。また、このことに關連して、北本『涅槃經』卷四・如來性品第四之一における、「復次、自正者、所謂得『是大般涅槃。』(大正一二・三八七頁中)という經文以降の説明として、『大般涅槃經義記』卷二では、「復次自正所謂得是大涅槃下、是其菩薩所說之法。依『佛所開、爲』他說故。此與『向前長壽品中辯義、相似。』(大正・六六三頁下)と、南本と六巻本における品名に言及する。さら

智顛の教學における病行について(日比)

- に、同一箇所には、「六卷經中、亦同此說。」(同)という記述も見られる。以上のように、慧遠が『涅槃經』の異譯本も参照していたことは、坂本廣博『涅槃經義記』について「(印度學佛教學研究)二六二、一九七八)を参照。

- (25) 大正三七・七二九頁中。
 (26) 大正三七・七二九頁中。
 (27) 大正一二・四七四頁上〜四八五頁中。北本『涅槃經』卷一・梵行品第八之五には、「爾時、王舍大城、阿闍世王、其性弊惡、意行殺戮、具口四惡、貪・恚・愚癡、其心熾盛。唯見現在、不見未來。純以惡人而爲眷屬。貪著現世五欲樂故、父王無辜、橫加逆害、因害父已、心生悔熱、身諸瓔珞・妓樂不御。心悔熱故、遍體生瘡。其瘡臭穢、不可附近。尋自念言、我今、此身已受花報。地獄果報、將近不遠。爾時其母、字草提希、以種種藥、而爲傅之、其瘡遂增、無有降損。王即白母。如是瘡者、從心而生、非四大起。若言衆生有能治者、無有是處。」(大正一二・四七四頁上中)とある。ここでは、阿闍世王の性格が弊惡であることが綴られ、その性によって罪のない父を殺す話が説かれる。阿闍世王は父を殺したことによって、心・身共に病を患うことが分かる。また、同經卷二〇・梵行品第八之六には、「爾時世尊、在雙樹間、見阿闍世悶絕、蹙地、即告大衆。我今、當爲是王、住世至無量劫、不入涅槃。」(大正一二・四八〇頁中下)とある。すなわち、自らの

行いを後悔した阿闍世王が悶絶し、地面に倒れこんでいる状況を見た釋迦は、阿闍世王を救うために般涅槃に入らないと宣言する。そして、この記述の少し後に、釋迦が大光明を放ち、阿闍世王の心・身の病を治癒することが、「爾時世尊大悲導師、爲阿闍世王、入月愛三昧。入三昧已、放大光明。其光清涼、往照王身、身瘡即愈、鬱蒸除滅。王覺瘡愈、身體清涼。」(大正一二・四八〇頁下、四八一頁上)と記される。

- (28) 大正三八・四七二頁中。
 (29) 大正一四・五四四頁下。
 (30) 大正一四・五四四頁下。
 (31) 大正一四・五四四頁下。
 (32) 大正一四・五四四頁下、五四五頁上中。
 (33) 『大乘義章』卷一二において、『涅槃經』の五行義を解説する箇所には、「五行之義出涅槃經。言病行一者、從所治、爲名。罪業、是病。治病之行故、名病行。」(大正四四・七〇三頁中)とある。このことから慧遠は病行の内容を、病を治す行爲と理解したと言える。
- (34) 大正三七・四七七頁下。
 (35) 大正三八・五四七頁上。
 (36) 後述のように、「室内六品」という言葉の典據は、大本『四教義』卷一〇(大正四六・七五九頁上)に確認できる。本論に關係はないが、室内六品の内容について、『維摩經文疏』

卷一〇・方便品之二には、「今明淨名託疾興教、意乃有_レ四。經文大判、總爲_二二段。第一、從_レ此(『維摩經』卷上・方便品第二、其以_レ方便、現_レ身有_レ疾)、大正一四・五三九頁中)下、訖_レ菩薩品、有_二兩品半。是、室外說法、明_レ彈呵折伏。第二、從_レ文殊問疾品去、入室有_二六品。是、室內說法、明_レ引接攝受。以_レ折伏・攝受一故、令_二正法得_レ久住。……」(續藏一・二八・一七丁左下)と記される。すなわち、室内六品では維摩詰による佛弟子、及び諸菩薩に對する攝受の說法が明かされることが分かる。

- (37) 本論に引用した『維摩經玄疏』卷四には、「衆生之疾、雖有_二多塗、論其正意、不_レ出_二四種。」(大正三八・五四七頁上)とある。ここにおける四種の内容に關しては、『維摩經』卷中・文殊師利問疾品第五で、文殊菩薩と維摩詰がなす維摩詰の病についての、「問。地大・水大・火大・風大、於_レ此四大、何大之病。答曰。是病、非_レ地大、亦不_レ離_レ地大。水・火・風大、亦、復如_レ是。而衆生病、從_二四大起。以_レ其有病、是故我病。」(大正一四・五四四頁下)という問答に見える地大・水大・火大・風大の四大をもつて、四種の内容とすることができよう。
- (38) 大正四六・七五九頁上。
 (39) 續藏一・二八・九九丁右上。
 (40) 續藏一・二八・九九丁右上。
 (41) 四分煩惱については、『次第禪門』卷二・分別禪波羅蜜前

方便第六之一における、外方便の第三葉五蓋に關する問答中に、「問曰、不善法塵無量。何故、但棄_レ五法。答曰、此五蓋中、即有三毒。等分爲_二根本。亦得攝_二攝八萬四千塵勞門。所以者何、貪欲蓋即貪毒、瞋恚蓋即瞋毒、睡及疑、此二蓋、共爲_二癡毒。當_レ知、即具_二三毒。掉悔蓋、通從_二三毒起。即等分攝、合爲_二四分煩惱。」(大正四六・四八九頁中)と說かれる。この文章によれば、四分煩惱とは貪欲・瞋恚・愚癡・等分であることが分かる。四分煩惱は、異なる文脈で『法華玄義』にも見られる。すなわち、同書卷一下には、「問。論云、四悉檀、攝_二八萬四千法藏。其相云何。答。賢劫經云、從_二佛初發心去、乃至_レ分_二舍利、凡三百五十法門。一一門、各有_二六度。合二千一百度。用_レ是度、對_二破四分煩惱。合成_二八千四百。約_二變爲_レ十、合八萬四千也。」(大正三三・六八九頁中下)とある。ここでは、『大智度論』卷一にある、「四悉檀中、一切十二部經、八萬四千法藏。皆是實、無_二相違背。」(大正二五・五九頁中)という記述の中の、八萬四千の法門に關する問答がなされる。その答えとして、竺法護(二三九〜三一六)譯『賢劫經』が引用される。『法華玄義』で引用される『賢劫經』卷二「諸度無極品第六の原文には、「是諸比丘菩薩所_レ行、二千二百寂然度無極。菩薩大士、若速_レ解是、皆致得_二一切諸法、殊特玄妙無際之行、無_レ等無_レ倫、懷_レ來聖哲、無_レ所_二恃仰、消_二一切塵、無_レ所_二至湊、斷_二諸狐疑。是二千二百、其中、別_二百度無極。主除_二四大去六衰令_レ無_二

有餘。獨_レ步_二三界、往來周旋、遍入_二三世。猶如_二日月不_レ畏衆冥。成_レ就_二萬物百穀草木、仰天之茂、皆因_二地生。菩薩如_レ是。二千二百諸度無極、及是百度無極。其二千一百諸度無極、貪婬・怒・癡・等分四事、各二千一百、合八千四百。八百四百、各別有_二十事、合八萬四千。以能具_二足度無極。」(大正一四・一二頁下〜一三頁上)とある。ここに見える「貪婬・怒・癡・等分」の四つが天台の教學で四分煩惱と呼ばれることが分かる。話は逸れるが、引用文中の冒頭にある諸比丘と菩薩が行ずる二千百の度無極(波羅蜜)という數には問題があり。湛然によれば、二千百の度無極とは、引用した『賢劫經』の經文の前に羅列される百九十六の度無極から割り出される數である。『止觀輔行傳弘決』卷一之五では、「若賢劫經、佛初發心、至_レ分_二舍利、凡有_二三百五十度門。一一皆有_二六度、合二千一百。又對_二四分、合八千四百。一變爲_レ十、合八萬四千。彼經第二、結_二一名、名_二度無極。結_二名、唯有_二一百九十六。如_二三十七道品之流、但、結爲_二一數。若各開_レ之、即三百五十。」(大正四六・一七五頁下)と計算される。二千百という數字になるために、三百五十度と、各々の度の中に含まれる六度を掛け合わせることは理解できよう。しかし、三百五十という數字を導き出すには、『賢劫經』中に、「有_二四意斷度無極。有_二四神足度無極。有_二四禪度無極。有_二四意止度無極。有_二四諦度無極。有_二信根、精進根・意根・智慧根・定根度無極。有_二信力・精進力・意力・定力・智慧力度

智頭の教學における病行について(日比)

無極。有_二七覺意度無極_一。有_二八品道行度無極_一。(大正一四・一二頁中)とあるような、複数の内容を含むものを別々に計算する必要がある。これによって、合計三百五十の法門が数えられるのである。また、右の經文中、四意斷(四正勤の古譯)・四神足・四意止(四念處の古譯)・信根等の五根・信力等の五力・七覺意・八品道(八正道)を指して、『止觀輔行傳弘決』では三十七道品の流れと呼ぶと考えられる。

- (42) 續藏一・二八・一〇〇丁左上。
 (43) 大正一四・五三九頁中。
 (44) 續藏一・二八・一八丁右上下。
 (45) 大正一四・五四四頁中。
 (46) 大正三三・八八一頁中。
 (47) 大正三三・八八一頁中下。引用文中の「八・六・四・二、及十千等」という記述は、五種病人それぞれの成佛までにかかる時間を表す。すなわち、南本『涅槃經』卷一〇・現病品第十八には、「迦葉、有_二五種人_一、於_二是大乘大涅槃典_一、有_二病行處_一、非_二如來_一。何等爲_レ五、一、斷_三結_二、得_二須陀洹果_一、不_レ墮_三地獄_二、畜生_一・餓鬼_一。人_・天_{七返}、永斷_三諸苦_一、入_二於涅槃_一。迦葉、是名_二第一人有病行處_一。是人、未來過_二八萬劫_一、便當_レ得_二阿耨多羅三藐三菩提_一。迦葉、第二人者、_二是人未來過_二六萬劫_一、便當_レ得_二成_二阿耨多羅三藐三菩提_一。迦葉、第三人者、_二是人未來過_二四萬劫_一、便當_レ得_二成_二阿耨多羅三藐三

菩提_一。迦葉、第四人者、_二是人未來過_二二萬劫_一、便當_レ得_二成_二阿耨多羅三藐三菩提_一。迦葉、第五人者、_二是人未來過_二十千劫_一、便當_レ得_二成_二阿耨多羅三藐三菩提_一。」(大正一二・一六七三頁上中)とある。またこのことは、同經卷一九・德王品第二十二之一に、「須陀洹者、八萬劫到。斯陀含者、六萬劫到。阿那含者、四萬劫到。阿羅漢者、二萬劫到。辟支佛者、十千劫到。」(大正一二・七三四頁下)と、簡潔にまとめて説かれる。

- (48) 引用した『法華玄義釋籤』卷九の記述について、證眞(一一三二頃～一二二〇頃)は『法華玄義私記』卷四本で、「故與漸次聖_(要カ)、兒行同者、意云、經明_三三病_一、是明_二凡病_一。又明_二五病_一、是聖病也。欲_レ明_三大聖樂爲_二此凡_一・聖漸次_一。病行即同_二聖行及嬰兒行_一、從_レ小_レ至_レ大、漸次行也。」(佛全二一・一四八頁上下)と述べる。すなわち、證眞によれば湛然は病行を、聖行や嬰兒行と同様に小乘から大乘へ段階的に進んで行く修行であると理解する。ちなみに、嬰兒行を漸次の行とすることは、『法華玄義』卷四上(大正三三・七二四頁中)・『法華玄義釋籤』卷九(大正三三・八八一頁上中)における嬰兒行に關する解説を参照されたい。また、證眞は現病品に説かれる三種・五種の病をそれぞれ凡・聖の病とし、この兩病の説は釋迦が凡・聖漸次の行をなすことを明かすための説とする。つまり、證眞によれば、湛然は現病品における三種・五種の病を釋迦が示す病とする立場にあ

ると考えられる。また、湛然と證眞が示す病行を漸次の行とする理解に乗じて、癡空（二七八〇〜一八六二）は「法華玄義講義」巻四で、「既偏大小、義該三人・天。理亦應偏、謂示一人・天、大・小遠理用。」（大系『法華玄義』三・一六七頁）と述べる。しかしながら、本論に引用した「法華玄義釋籤」中に見られるような病行を漸次の行として捉える立場や、三種・五種兩病を大聖、すなわち釋迦の所作とする思想などは、管見の限りでは智顛、灌頂兩者の思想には確認できず、湛然独自の解釋と言える可能性がある。ところで、三種・五種兩病人をそれぞれ凡・聖の病人とする證眞の解説は明らかに、灌頂が現病品の釋に示す三種・五種の病人の關係性の解釋と軌を異にする。『大般涅槃經疏』卷一三には、「迦葉世有三人下、…先、明三病人。次、明五病人。此中三病人異。前三人。前三人不_レ差。今三人、不差・差・差。初、是三種罪人。次、是二乘小道。三、是聞經菩薩。…迦葉有五種人下、還成_二上第二病人_一。既言_下遇緣可_レ差、不_レ遇緣死_上。即是四果緣覺。此等帶_レ病修行故、言_二有病行處_一。」（大正三八・一二一頁中）と記される。智圓（九七六〜一〇二二）述『涅槃經疏三德指歸』卷一〇・現病品に、「異前三人者、前即大眾所問品。彼文三種病人、但是此中初罪人耳。」（續藏一・五八・三四二丁左下）とあることから、『大般涅槃經疏』における前の三人とは、南本『涅槃經』卷一〇・一切大眾所問品第十七（大正一二・六六六頁中下）に説かれる、一闍提と

智顛の教學における病行について（日比）

誹謗正法・作五逆罪を犯す三人を指すことが分かる。また、『大般涅槃經疏』で「不差・差・差」とある記述を、智圓は「一、不差。二、不差差。三、差差。文逸_二不差二字_一也。」（續藏一・五八・三四二丁左下）と訂正する。一切大眾所問品所説の三種病人は、第一の不差に當たる。灌頂はこれを三種の罪人と呼ぶ。また、第三の差差は聞經菩薩を示すのであろう。そして、三種・五種兩病人の關係性としては、灌頂は五種病人の説が、三種病人の内、第二の不差差に該當する二乘小道に當たると理解することが読み取れる。

(49) 大正三三・七二四頁下。

(50) 大正三三・八八一頁下。

(51) 南本『涅槃經』卷一一・聖行品第十九之一（大正一二・六七八頁中下）の取意。また、浮囊に關する話は、同品で戒について説かれる箇所（大正一二・六七三頁下〜六七四頁上）にある。

(52) 大正四六・一〇六頁中。

(53) 大正四六・一〇六頁中。引用文中の三種調伏と、四種慰喻とは、「止觀輔行傳弘決」卷八之三で、「三觀調伏、四教慰喻」（大正四六・三九七頁上）と説明される。

(54) 『止觀輔行傳弘決』卷八之二における、「空品云、業力機關、假僞空聚。地水火風、共相殘害。猶_二如四蛇同共_一。四大蛇、其性各異。二上二下、諸方亦然。心・識二性、躁動不安。」（大正四六・三九七頁上）という記述。

(55) 大正四六・三九七頁上↓下。

(56) 南本『涅槃經』卷一〇・現病品第十八における原文には、

「如來、往昔已於無量萬億劫中、修菩薩道、常行愛語、利益衆生、不令苦惱。施疾病者、種種醫藥。何緣、於今自言有病。：世界成時、從金剛際、起金剛座、上至道場菩提樹下。菩薩坐已、其心即時、逮得十力。如來、今者不應如彼嬰孩小兒。嬰孩小兒、愚癡、無智、無所不能說。：爾時、世尊大悲、熏心、知諸衆生、各各所念、將欲隨順、畢竟利益、即從臥起、結跏趺坐。顏貌熙怡、如融金聚。面目端嚴、猶月盛滿。形容清淨、無諸垢穢。放大光明、充遍虛空。其光、大盛、過百千日。：迦葉、我今、實無一切疾病。所以者何、諸佛世尊、久已遠離一切病故。迦葉、是諸衆生、不知大乘方等密語、便謂如來眞實有疾。」(大正一二・六六九頁下↓六七二頁中)と記される。

(57) 大正一六・三四〇頁上中。

(58) 『高僧傳』卷八には、「釋僧宗：晚又、受道於斌・濟二法師、善大涅槃及勝鬘・維摩等、每至講說、聽者將近千人。：魏主元宏、遙挹風德、屢致書、并請開講。齊太祖、不許外出、宗講涅槃・維摩・勝鬘等。近盈百遍、以從來信施、造大昌寺、以居之。」(大正五〇・三七九頁下↓三八〇頁上)、「釋寶亮：憩靈味寺、於是續講衆經、盛于京邑。講大涅槃、凡八十四遍。成實論十四遍。勝鬘

四十二遍。維摩二十遍。其大・小品十遍、法華・十地・優婆塞戒・無量壽・首楞嚴・遺教・彌勒下生等、亦皆近十遍。」(大正五〇・三八一頁中下) などとある。

〈キーワード〉智顛、『涅槃經』、病行、『維摩經』、權疾